

達人の作法

環境融資の先駆者

ふじさき ゆうみ
藤崎 有美 さん

(38)

◆略歴 2000年東京農工大院修了。テフ・ラインランド・ジャパン(横浜市)などを経て、07年三井住友銀行入行。法人企業統括部で環境、農業などを担当。
◆好きな言葉 マイペンライ (タイ語・大丈夫の意)

企業の環境への取り組みを独自基準で評価し、結果に応じた優遇金利でお金を貸す。こんな環境配慮型融資を日本の大手行では初めて三井住友銀行で設計した。企業の環境対策をじかに確認するため、工場などを回る回が多い。

融資先の特殊車両メーカー、極東開発工業の三木工場(兵庫県三木市)。ヘルメットをかぶり、白いジャケット姿のまま油まみれの工場に入っていく。「ミ」を圧縮する回



環境への取り組みを工場長らから熱心に聞き取る藤崎さん(右)(兵庫県三木市で) 近藤誠撮影

エコ企業 金利で優遇

転板が電動の最新型収集車前に、工場長は「CO₂(二酸化炭素)排出量は少ないが、高額ですぐには売れない」とこぼす。迷いなく「時代が後からついてきますよ」と言った。

温室効果ガスの排出権取引の市場規模は数十兆円に成長するとの予測がある。環境に強い企業との関係を強化すれば、将来のビジネスで有利になると判断した同行から、2007年に環境のプロとしてスカウトされた。

当時、独審査会社で国際標準化機構(ISO)認証の主任審査員をしていた。若い日本女性がこの資格を持つのは極めて異例だ。高く評価されていたが「銀行で企業の環境対策を後押しすれば、もっと直接世の中に働きかけられる」と金融界に飛び込んだ。

企業がどれだけ環境を重視しているかは、専門知識がないと把握できない。CO₂削減など5分野100項目で採点し、「AAA(90点以上)」から7段階で格付けする画期的な仕組みを作った。環境への真剣度を「見える化」することで、誰にでも企業の姿勢がわかるようにしたのだ。

深い経験と知識があればこそ、ヒアリングで判断できる「経営者の環境への思い」も評価に加え、中小企業でも融資を受けやすくなった。

だが、営業現場はまだ、環境への意識が低く、誰も耳を

や、環境ベンチャー企業のビジネスコンテストの審査員、京都市や三重銀行の環境セミナーで講師を務めるなど、引っ張りだこの状態だ。

環境融資に続いて、11年4月には、企業のおもてなしと農業に関する取り組みを支援する「食・農評価融資」の開発に携わった。ビルの環境性能などを評価する「環境配慮ビルディング評価融資」も手がけるなど、活躍の舞台を広げている。

大手行で受賞初の快挙

他行をうならせた環境融資は、財務省や厚生労働省、農林水産省、環境省などが後援する「第7回エコプロダクツ大賞」(10年11月)で、エコサービス部門の大臣賞を受賞した。環境負荷の軽減につながる製品やサービスを表彰する制度で、大臣賞受賞は大手行では初めてだ。

銀行以外の業界でも環境の専門家として知名度は高い。国土交通省の環境不動産関連委員会の委員

貸さなかった。「当たって砕けても信念を貫く」。そんな覚悟で、「環境と企業活動の調和を図らないと誰も生き残れない」と熱っぽく語り続け、行内の雰囲気を変えた。

銀行の激務の合間にこなす環境関連の講演依頼は、原則断らない。準備は徹夜になるが「思いを伝える好機」と思うからだ。

08年10月に始めた環境融資は3年間で130件、総額4000億円を超えた。特殊な評価型融資では異例のことだ。専門性が高いため他行は簡単に追従できない。単なる収益だけでなく、「環境に強い三井住友」として、企業イメージを向上させた。

2012年(平成24年)1月7日付 読売新聞(夕刊)

当たって砕けても信念貫く、時代は後からついてくる